

## 原発事故で何が起きているのか 真実に目を向けよう



著者、朝日新聞記者の青木さんは、この7年間、東電福島第一原発事故を追いつけている。「復興」の邪魔になる「不都合な真実」を隠そうとする政府の策動に対し、現場で直接見聞した「不都合な真実」を多くの人に知らせて、現状を変える力になろうという思いが伝わる。この本に書かれた真実を少し紹介して、その思いに応えたい。

【東電現地採用者】 事故前はあこがれの東電社員、事故後は憎まれながらも使命感だけで作業に取り組んだ。初期作業が終わった初夏、若い現地採用社員が内部被ばく量を測ると50mSvを超えていた。被ばくを避けるために

東電を辞めて非難されるのは怖い、働き続けるのも怖くて心を病んでいく。

【除染作業員】 福島県南相馬市の真宗大谷派別院に保管されている出稼ぎ除染労働者4人分の遺骨は、引き取り手がない。除染労働者は多重下請け構造の中で悪徳業者に拘束され、手当付き1日1万8千円のはずが7千円しかもらえないこともある。時には野生化したイノシシや猿の群れに遭遇するようなストレスの多い職場で、酒におぼれてのケンカ、窃盗等の犯罪や持病を悪化させる人もいる。その中でも「人の役に立つ仕事だから」と誇りを持って働いていた作業員のプライドをズタズタにされた事件があった。小さな沢の急峻な坂で落ち葉や土をかき集めて袋詰めしようとした時、「除染ごみを川に流せ」という命令がおりた。高圧洗浄後の汚染水の垂れ流し、元々落ちている葉や茎は除染範囲（家や道路の周囲20m）外に捨てるなど、手抜き除染が横行していた。青木さんたちは厳冬の中で張り込みをして、現場を押さえ報道。その結果ガイドラインが改訂され、除染作業員が声を上げるようになったが、不正は終わらず、除染作業員の非業の死も続いている。

【放射能汚染の隠蔽】 2013年8月ガレキ撤去作業員10人以上が基準以上の汚染に見舞われる。秋になって、南相馬市で収穫されたコメに基準値以上の汚染が見つかった。前年には南相馬市で基準値を超えるコメはなく、本格的な栽培を目指し努力を重ねていた矢先である。農林水産省は「ガレキ撤去での放射性物質飛散が原因の可能性」として東電に再発防止要請をした。2014年7月、ガレキ粉塵が南相馬のコメを汚染した可能性というニュースは朝日新聞を皮切りにNHKや読売新聞でも報道され、地元から不安の声がわき起こる。放射性物質を測定していた大学のチームからもガレキ撤去時の放出を裏付ける発表があった。ところが、2014年7月18日、東電が4時間で計4兆ベクレル放出と報告した放射性セシウムは、原子力規制委員会の検討会を繰り返す度に減少し、10月31日には1100億ベクレル(当初の1/36)にされた。そして、復興庁、原子力規制庁、エネ庁、環境相、厚生労働省、農林水産省幹部による“秘密会議”で東電を守り、帰還政策・再稼働を進めるために「ガレキ撤去と農産物の基準超えの関係性は認められない」ことを結論づけ、ガレキ撤去作業による放射能飛散事実は握りつぶされたのである。

【捨てられた避難者たち】 原発避難者いじめを「なかったことにする」学校の対応、避難者を消し去ろうという国、しわ寄せが弱い者に集中する厳しい現実が明らかにされる。

この本を読んで真実を求める記者魂に触れ、怒りを共にしよう。